

Title	悪性リンパ腫
Author(s)	薄金, 眞雄
Citation	癌と人. 4 P.21-P.22
Issue Date	1976-06-01
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24255
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

6. 悪性リンパ腫

薄 金 眞 雄*

6-1. 悪性リンパ腫とは

胃ガン、肺ガン、乳ガン、子宮ガンなどに比べ、あまり聞き慣れない病気、“悪性リンパ腫”とはいかなる病気なのか……を、まず御説明いたしましょう。

今、体内に細菌や異物が入り込むとします。するとこれに立ち向かって、細菌の増殖を阻止し、あるいは異物を貧食する、組織があります。すなわち、体の防御機構として働いている組織です。これがリンパ網内系臓器であり、リンパ腺、脾臓、扁桃などが含まれます。悪性リンパ腫は、この臓器から発生する悪性腫瘍なのです。しかもこの病気は、他の悪性腫瘍と同じく、その病因は不明であり、どの年代にも発症し、女性よりやや男性に多い傾向にあります。

6-2. 悪性リンパ腫の症状は

たいてい頸部リンパ腺腫大が、最初の徴候で、片側にみられますが、両側性のこともあります。稀ではありますが、腕窩や鼠径リンパ腺が最初に大きくなる事もあります。しかし腫大したリンパ腺は、無痛性で圧痛もありません。大きさはエンドウ大から鶏卵大までいろいろあり、触

ると硬く、放置しておく次第に大きくなります。また、数ヶ月から数年という間隔をおいて、他の場所のリンパ腺腫大を併発してきます。大抵の患者では、原発部位と隣接する領域に、最初は現われます。その他、縦隔に飛火することもあり、咳、呼吸困難、喘鳴あるいは嚥下困難を起したりします。この様な病状の進展とともに、38°~39℃の原因不明の発熱、体重減少、盗汗、痒痒感などの全身症状も現われてきます。そして脾臓、肝臓がはれ、高度の貧血に落ちたり、悪性腫瘍末期に特有の、悪液質の状態になったり、感染症を併発して死亡するわけです。

6-3. 悪性リンパ腫には、どんなタイプがあるか

悪性リンパ腫には、大きくわけてホジキン病と、ホジキン病以外のリンパ腫の2つがあります。その特徴は、ホジキン病の単一発生性なのに比べ、ホジキン病以外のリンパ腫が多中心性に発生し、リンパ組織以外の胃、腸や骨をも侵します。また治療効果にも差が認められます。

これら2つのリンパ腫の組織像は、予後と密接な関係にあります。ホジキン病は①リンパ球増多型、②結節性硬化型、③混合細胞型、④リ

* 大阪大学助手（微生物病研究所附属病院外科）

リンパ球欠乏型の4つに分けられ、前2者より後2者の方が予後が悪いようです。

また、ホジキン病以外のリンパ腫は、次の5つに分類することが出来、更にその各々は瀰漫型と結節型とに二分されます。すなわち①良く分化したリンパ球型、②あまり良く分化していないリンパ球型、③組織球型、④混合型、⑤未分化型であります。一般に結節型は瀰漫型より予後がよく、また良く分化したものがそうでないものより予後がよいとされています。

6-4. 悪性リンパ腫の診断と病状の進行程度について

診断は、腫大したリンパ腺をとりだして、組織検査することにより決定されます。

それとともに、注意深い診察、血液検査、尿検査、胸部X線撮影、骨X線撮影、胃腸透視、下肢リンパ管造影、腎盂尿管造影、骨髄検査、肝機能検査をおこない、病状がどの程度進んでいるかをきめます。この病状の進行程度(=病期という)は、治療開始前に必ず確定しておかねばなりません。というのは、治療計画上、組織診断と同じほど重要だからであります。

病期はIからIVまであります。病期Iは、1つのリンパ腺領域に限られるもの、病期IIは2つ以上のリンパ腺領域で横隔膜の一方に限られるもの、病期IIIは横隔膜の両側にわたるもの、病期IVは骨、肺臓、肝臓等が侵されているものであります。

6-5. 悪性リンパ腫の治療とその予後について

悪性リンパ腫の治療には、病変が限局化している場合、放射線療法がきわめて有効であります。しかし悪性リンパ腫は概して早期から全身へ蔓延する傾向にあり、これに対しては、制ガン剤を使う化学療法が必要です。

そこで前項で述べました、組織像と病期が問題になってきます。まずホジキン病では、リンパ球増多型で病期Iのもの、ホジキン病以外のリンパ腫では、結節型でかつ良く分化したリンパ球型を示す病期Iの限局化したものが、放射線照射により治療され、その他は化学療法を主体に、放射線を併用します。

この様な治療によって、ホジキン病では80%以上が5年以上生存出来るようになります。しかし、病期IVだけをみれば、39%と低く早期発見の必要性が痛感されます。

6-6. 最後に

悪性リンパ腫は、ふつう痛みのない、腫大したリンパ腺をふれることが、最初の徴候です。このリンパ腺は、胃や腸と異なり、自分の手で調べることが出来ます。従って自覚さえしておれば、早期発見はいたも簡単であります。そして異常と感じたら、すぐ専門医の検診をうけることです。